



里川研究掲示板

当センターでは、「里川」というコンセプトについて研究活動をしています
このコーナーでは、活動動向を随時お知らせしてまいります

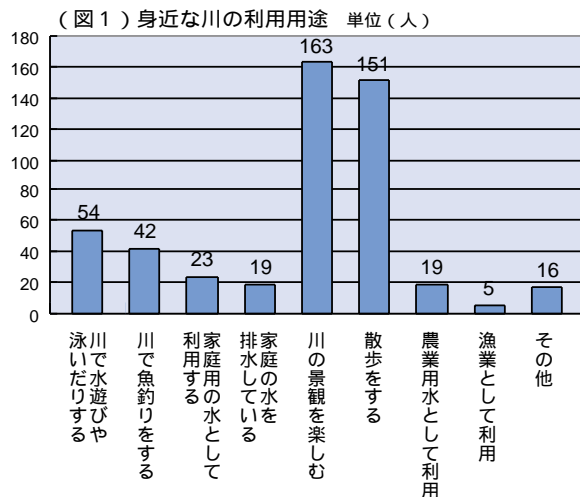
「川の値段」

「第10回水にかかわる生活意識調査」から

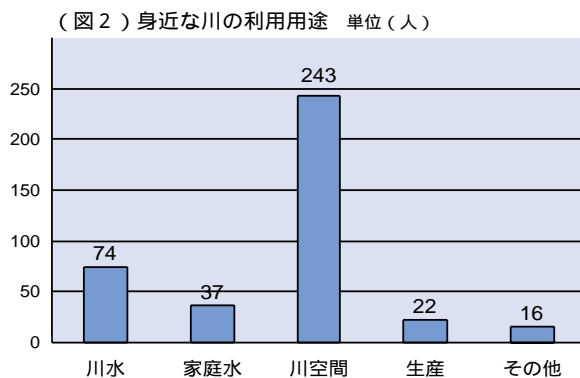
当センターでは毎年6月下旬に東京圏、大阪圏、中京圏の在住者約600名を対象に「水にかかわる生活意識調査」を実施しています。詳細はセンターホームページ
(<http://www.mizu.gr.jp/>) で公開しています。

- Q1 あなたは身近に感じる川がありますか。
Q2 その川をどのように利用していますか
(いくつでも) を
- 1 川で水遊びや泳いだりする
 - 2 川で魚釣りをする
 - 3 家庭用の水として利用する
 - 4 家庭の水を排水している
 - 5 川の景観を楽しむ
 - 6 散歩をする
 - 7 農業用水として利用
 - 8 漁業として利用
 - 9 その他
- 303名の方に回答していただき、半数以上の方が「川の景観を楽しむ」「散歩する」を選びました(複数回答)。(図1)

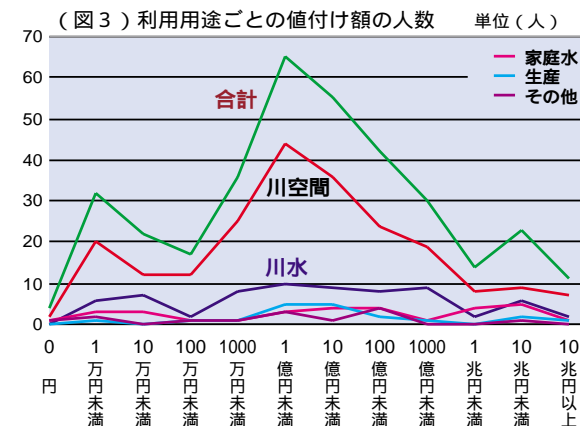
今年の調査では、里川研究を念頭に置いて、以下の質問を投げかけてみました。



次に、以上の利用方法を4つにまとめてみました。
川で水遊び・泳ぐ
川水派：川の水そのものに価値があると思っている。
家庭用の水として利用したり排水する
家庭水派：上下水道の取水・排水先として価値があると思っている。
川の景観を楽しむ、散歩する
川空間派：河川敷まで含めて川の空間に価値があると思っている。
農業用水、漁場として利用
生産派：河川を生産要素、生産の場として価値があると思っている。



この4つの「派」の人数を表したのが(図2)です。
次に、この身近な川に値段をつけてもらいました。通常、「川の経済的価値」などと、川の便益を測定する場合には、ある仮想状況(例えば、川で釣りをする場合など)を設定して、それに対して「あなたはいくら支払ってもよいですか」と回答者の支払意思を訊ねます。これを仮想市場法(CVM)と呼びますが、さ



さまざまなバイアスがあり使いこなすことが難しいのも事実です。そこで、今回の調査では肩肘張らずに、そのまま値段をつけてもらいました。(図2)で分けた4派ごとに、値付け額と人数を表したのが(図3)です。
ここで基調となっているのは、「川空間派」の身近な川に対する値段感覚です。厳密に支払意思額を訊いているわけではありませんので、「運動や遊び場として利用」「バーベキューなどができるレクリエーション空間」「都市の中の不動産価値」「生きものが生息するかけがえのない空間」・「思い出がたまった経験価値」等々、多様な思いが込められているはず。圧倒的多数を占める川空間派の人数分布は、1億円未満の値付けをする人を頂点とする山型のカーブを形成しています。一方、1万円未満の人が少なからずいることにも驚かされます。さまざまな要素を合成した川の値段。田舎の川や、しょっちゅう水が溢れる川、清流で知られた川などについては、どのような傾向が出るのか気になるところですが、数字の裏に込められた、個々の幅広い思いを推し量ることも大切ではないでしょうか。

水の文化19号予告

特集「オランダ水の合意形成」(仮)

水と闘うことを宿命づけられた国オランダは
水との闘いゆえに
あるシステムを構築してきました
建国前からある水管理委員会
水害を防ぐ大治水プロジェクト
NGOによる水辺湿地保全
等々、オランダ人が身につけてきた
社会の運営システムを探ります



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介します。

ユニークな水の文化学習活動を行っている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行っている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はモノクロで皆様に配布しておりますが、写真をはっきり見たい!というご要望にお応えし、11号からはホームページにてカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化「人」ネットワーク 秋の登場者

当センターホームページの、水の文化「人」ネットワークコーナーでは、以下の方々を順次アップロードしています。

蔵治光一郎 東京大学大学院農学生命科学研究科講師

斎藤善之 東北学院大学経済学部助教授

後藤雅知 千葉大学教育学部助教授

編集後記

私たちが日常的にもっとも多く接する水は、水道水です。水道水は、いわば「魔法の水」の如く蛇口からふんだんに出てくる水。非常に大切なものであるが空気のようなものである。ところが、使ってしまった水は自分のあずかり知らぬが如く、さっさと捨ててしまふ。誠に無責任な所業である。これを「排水」とも「廃水」とも言うが、私は人間生活から排除された水「排水」として、人々に問いかけた水である。(吉)

水は資源であることに変わりはないと思うが、関わる意識と力によって、そうでないケースもある。様々な産業では廃棄物の再資源化が義務付けられている中で、水に対する再資源化も意識の転換で大きな可能性があると思う。(新)

使った水=汚い水、というのが今までの正直な感想。そう思うのも、排水として使った後のことは無責任・無関心だからだろう。排水された後のことを知り、自分が利用することを考えると、今使っている水の使い方がどうなのかが自然と見えてくる。(日)

先日の大雨、足元に貯まった物凄い量の水が早く引かないかと思つたそのとき、初めて水の行方、排水を意識した。見えないものを見る、というより意識することで新しい発見があるのは何も排水だけではないだろう。(ゆ)

何かと騒がしい温泉業界。昨今都会に温泉の看板で営業している施設をよく見かける。公衆浴場だと毎日お湯を取り替えねばならないが、温泉だとその義務がなく循環風呂でよいらしい。いわば排水をきれいにして再度利用できる。それを知らなければ「温泉だからぬるぬるしている」と納得し、知れば「やはり温泉は源泉かけ流しでないと」と思う。排水は難しい。(中)

下水道完備の東京の自宅では、食器の油污れは、紙などで拭いてから洗っている。土壌バクテリアを利用した浄化槽がある山小屋では、米のとき汁も油污れもバクテリア君の餌だから、胸を張って洗うことができる。油污れを拭いた紙を燃えるゴミに出すせつなき「都会でエコライフ」の道程は通じ。(賞)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第18号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁断転載複写

発行日

2004年(平成16年)11月

企画協力

沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授
嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 筑波大学教授

編集

吉田 稔 新美敏之 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川智明

発行

ミツカン水の文化センター
〒475-8585 愛知県半田市市村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353
ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
Tel. 03(5762)0244 Fax. 03(5762)0246

お問い合わせ